

職業奉仕の理解：職業奉仕の森

西村 美智子会員

今年度の地区職業奉仕のテーマは「職業奉仕の理解と実践」で、上期を「理解」下期を「実践」というように活動しようと思っています。今日は「理解」の部分を中心にお話します。

テーマ：職業奉仕の理解

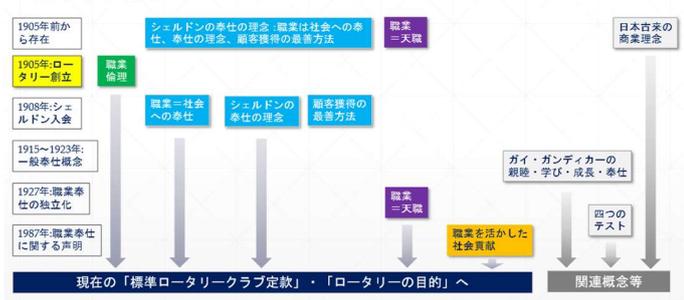
職業奉仕は、ロータリーの奉仕のなかで最も意義ある奉仕のひとつ、かつユニークな奉仕と言えます。その考え方は、他の奉仕団体と差別化を図るものと、特に日本では職業奉仕を大事に思うロータリアンが少なくありません。職業奉仕について色んな考え方があり、一本の大木ではなく「職業奉仕の森」と考えられます。「職業奉仕の森」の中で生い茂っている木々群は、いずれも「職業奉仕」に関連した価値あるものと考えられます。

職業奉仕の理解の流れとして、時系列で、職業奉仕概念の原点とその流れを見ていきます。

次に、職業奉仕の森、職業奉仕のそれぞれの木々群、職業奉仕のさまざまな概念を紹介します。

最後は、職業奉仕の定義として、現在の「標準ロータリークラブ定款」「ロータリーの目的」との関係を探ります。

「標準ロータリークラブ定款」・「ロータリーの目的」を構成する「職業奉仕」概念

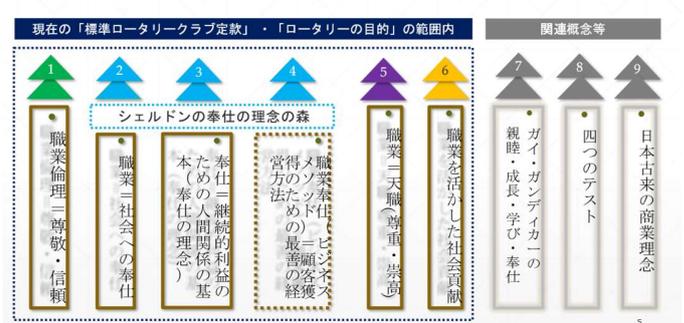


「職業奉仕」という言葉は、ロータリー創立時には存在しておらず、創立から22年経った1927年に生まれました。ですが、概念そのものは創立時から存在したと考えられています。最初「奉仕」は、今の五大奉仕のように分かれておらず、全部ひとくくりされていました。その中に職業奉仕の概念が存在していて、ロータリーの創立とともに、まずは「職業倫理（緑）」が存在していたと考えられています。「シェルドンの奉仕の理念（青）」とか「職業＝天職論（紫）」これもロータリーの創立前から世の中に存在していました。ロータリーに持ち込まれたのは、1908年にシェルドンが入会し、シェルドンの3つの考え方がロータリーに持ち込まれました。「職業＝天職論」はキリスト教と関係していて、ヨーロッパの方で発生しロータリーに持ち込まれたのは1927年くらいと考えています。最も遅く取り込まれた概念が、1987年職業奉仕に関する声明で発表された「職業を活かした社会貢献（オレンジ）」という概念です。

歴史の流れの中で、職業奉仕概念の原点はいろいろあり、そこから流れた考え方は、それぞれ独立して存在しつつ、お互いに影響し合ったり、変遷したり、時代

の流れとともに新たな原点が加わり、その結果現在の標準ロータリークラブ定款の定義にいたっています。ロータリーの目的にも職業奉仕の概念が色濃く刻まれています。定款や目的に直結しないまでも、日本古来の商業理念、三方よしや、ガイ・ガンディガーが唱えた、親睦・学び・成長・奉仕の概念、四つのテスト、これらも重要な関連概念として存在しています。

職業奉仕の森の概観



職業奉仕の森の木々群

①職業倫理

ロータリーの創立時にポール・ハリスが打ち出し、現在の標準ロータリークラブ定款や目的の中にも含まれています。2つあり「一業一会員制」と「規則的例会出席」ですが、これは国際ロータリーによって、事実上廃止、形骸化に追い込まれてしまっています。

職業分類に基づき、地域社会に存在する職種から一名の代表者を選び、その代表者をロータリーがその職種に派遣したロータリーの代表と考えます。これらの代表者が例会において、それぞれの職種の立場から得た経営に由来するアイデアを交換し、お互いが啓発を受けることにより、より高次の立場を獲得し、日々新たな職業倫理を反省し、噛みしめ、そして職場その他でこれを実践するという理論構造が与えられています。例会は職業上の問題を話し合い、啓発し合う場であり、親睦は会員がより高次の対社会的目的を達成するための下地／土壌、職業倫理のベースともなり得ます。

「入りて学び、出でて奉仕せよ」例会やロータリーに来て、学び、お互い切磋琢磨して学び合って、そこから出て行って奉仕を実践しなさい、ということです。

世のため人のための心をもって職業を営んでいると、「信用」が生まれ、長期的に安定した利潤を獲得する強靱な体質の企業を作り上げることができます。その原理の総体を職業奉仕と呼び、職業奉仕の中核にあるものが「職業倫理」です。職業における様々な関係として、①売主と買主、②職業間の相互関係（仕入、製造、卸、小売）、③同業者間の対立の問題、④同一職業内の労使の関係があります。これらの関係において職業倫理を高揚させると、尊敬と信頼を生み、事業は成功し、あらゆる人々が信頼と信用とに支えられて生活することにより地域社会を明るくするというのが「職業奉仕」の基本構想です。これについての個別具体的なアイデアを交換するためにロータリアンは例会に集まります。

シェルドンの奉仕理念

修正資本主義が世の中に出てくる前に、既に提唱していた学者で、ロータリー入会前から、ビジネススクールを創立し、販売学や経営学の観点から「最も奉仕す

るもの、最も報われる」と生徒たちに教えていました。ロータリーの職業奉仕の概念の中で最も重要であり、じっくり理解する必要があります。

②シェルドンの奉仕理念：職業を通じて社会に奉仕する
継続的な事業の発展を得るためには、自分の儲けを優先するのではなく自分の職業を通じて社会に貢献するという意図を持って事業を営む、即ち会社経営を経営学の実践だと捉え、原理原則に基づいた企業経営をすべきだと考えました。さらに良好な労働環境を提供するのは資本家の責務であると考え、資本家が利益を独占するのではなく、従業員や取引に関係する人たちと適正に再配分することが継続的に利益を得る方法だと考えました。

③シェルドンの奉仕理念：人間関係学から見た利益の適正な配分

事業主を取り巻く全ての人たちのおかげで事業が成り立っていると考えるならば、得た利益を、事業主が一人占めするのではなく、事業に関係する人たちと適正にシェアをして事業を進めていけば、必ずその事業は発展していくはずであるとのことです。

雇用主の従業員に対する責務

1. 適正な報酬を支払う
2. 安全、福利厚生、社会保障、快適な生活を保証
3. 従業員に教育の機会を与える

従業員の雇用主に対する責務

1. 職場では最善を尽くして働く
2. 過失を最小限におさえる
3. 会社の管理運営に協力する

雇用主と従業員がこの3種類の責務をお互いに果たすことが、会社の発展に繋がります。

④シェルドンの奉仕理念：顧客獲得のための最善の経営方法

経営学に基づいた販売術を、奉仕の原則を条件とする継続的に利益をもたらす常連客を保証する技術だと定義しています。リピーターを増やすように行動しなさい、ということなのです。

⑤職業＝天職論

「天職」は、日本だと一般的には「この仕事をするために生まれてきたと思えるような職業」というような意味で、自分の能力や性質にぴったりと合うというように使われ、宗教的な意味合いは薄いです。

一方、欧米では「天職」は歴史的に宗教との関係が深く、マックス・ヴェーバーが、1905年発表の『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』で、禁欲的プロテスタンティズムと資本主義の精神との関係を社会的に追究し、「天職」についても述べています。キリスト教信者は、自分が天国へ行けるかどうか最大の関心事で、神様が気に入るようなことをやれば、天国へ行かせてくれるのではないかと信じ、厳格に行動しました。人の事を考えてというよりも、自分が天国へいくために行動していたという、カトリックとプロテスタントでは、そのロジックが多少異なりますが、どちらも金儲けは卑しい行為で、お金が貯まったら教会に寄付するとか、禁欲にして浪費を慎むとか、そういったことを守りました。

世俗の職業は神の召命であり、現世において果たすべく神から与えられた使命と考える”Beruf（ドイツ語で「天職」、英語では”Vocation”）」という思想で、職業選択の自由はありませんでした。

ヨーロッパのロータリアンは歴史的に職業＝天職論が好きです。宗教的背景が彼らにはあるため、それを考えると納得できる気がします。日本人も江戸自体の商業理念の「三方よし」や、二宮尊徳の「報徳思想」が好きですが、そういうものを好む傾向にあるということと類似していると感じます。自分が育った地域の背景や文化が自分の考えに反映されていくということだと思います。

⑥職業を活かした社会貢献

1987年に職業奉仕に関する声明が発表され、従前の職業奉仕概念とは非常に異なる概念が追加されました。そして、2016年には「標準ロータリークラブ定款」の規定上、正式な定義として位置づけられました。

この概念においては、会員の役割として、自己の職業上の手腕を社会の問題やニーズに役立てるために、クラブが開発したプロジェクトに応えることが含まれます。これに伴い、「職業奉仕に関する声明」や「ロータリアンの行動規範」においても関連する文言が追加されました。「職業奉仕に関する声明」では、「職業奉仕は、ロータリークラブとクラブ会員両方の責務である」としている点、特徴的です。

「クラブの役割は、次によって、目標を実践、奨励することである」とされている

- ・頻繁に職業奉仕を実践すること
- ・クラブ自身の行動に職業奉仕を応用すること
- ・模範となる実例を示すこと
- ・また、クラブ会員が自己の職業上の手腕を発揮できるようなプロジェクトを開発すること

職業を活かした社会貢献のプロジェクトの例示

- ・学校での職業講話
- ・高校生の就職面接指導
- ・青少年のインターンシップ（職業体験）
- ・若者やベンチャー企業の起業支援
- ・障害者の職業訓練や雇用
- ・職業文化、産業文化の普及宣伝

例示的に列挙されていますが、これが職業奉仕なのか、当初の職業倫理の観点からすると首を傾げたくになります。

⑦ガイ・ガンディカーの親睦・成長・学び・奉仕

ガイ・ガンディカーは1923年に、国際ロータリーの会長になります。1923年というのは、関東大震災が起こった年で、この方を中心にして、日本に色んな援助物資、寄付をしていただきました。1916年、ガイ・ガンディカーは”A Talking Knowledge of Rotary（ロータリー通解）”という本を出版、まだ職業奉仕という言葉が生まれてない時代で、もう少し基本的な「ロータリアンは朝から晩までロータリアンでいなさい」ということを言っています。つまり個人的な活動、クラブ内の活動、同業者団体における活動、公共的かつ慈善的活動、すべての場面において、ロータリアンでいなさい、ということなのです。奉仕活動を、職業奉仕、社会奉仕と細分化することに何か意味があるか、という考え方があり、最近ではロータリー内でも、その考え方が出始めていますが、最初にガイ・ガンディカーが言っていました。

⑧四つのテスト

実践倫理の基準ということで、広く周知されておりま。日本語訳がものすごく間違っていて、違う意味になっているのがあります。

⑨日本古来の商業理念

三方よし

「売り手よし、買い手よし、世間よし」

二宮尊徳の報徳思想

これもロータリーの職業奉仕の理念にすごく似ていると言われています。

定款・目的における職業奉仕

標準ロータリークラブ定款 第6条 2

	1 職業倫理	2 奉仕の理念	5 職業＝天職	6 職業を活かした社会貢献
奉仕の第二部門である職業奉仕は、				
事業および専門職務の道徳的水準を高め、	✓			
品位ある業務はすべて尊重されるべきであるという認識を深め、			✓	
あらゆる職業に携わる中で奉仕の理念を実践していくという目的を持つものである。		✓		
会員の役割には、				
ロータリーの理念に従って自分自身を律し、事業を行うこと、		✓		
そして自己の職業上の手腕を社会の問題やニーズに役立てるために、クラブが開発したプロジェクトに応えることが含まれる。				✓

「ロータリーの目的」における「職業奉仕」

	1 職業倫理	2 職業＝社会への奉仕	3 奉仕の理念	5 職業＝天職
ロータリーの目的は、				
意義ある事業の基礎として奉仕の理念を奨励し、これを自むことに努める。			✓	
具体的には、次の各項を奨励することにある：				
第2 職業上の高い倫理基準を保ち、	✓			
役立つ仕事はすべて価値あるものと認識し、				✓
社会に奉仕する機会として		✓		
ロータリアン各目の職業を高潔なものにすること	✓			
第3 ロータリアン一人一人が個人として、また事業および社会生活において、日々、奉仕の理念を実践すること；			✓	

標準ロータリークラブ定款、第6条の2に奉仕の第二部門としての職業奉仕の定義が書かれています。書かれている文章を分解すると、職業倫理、シェルドンの理念、職業＝天職論、がフレーズごとに込められています。ロータリーの目的においても、ものすごく職業奉仕のことを言っています。これも分解していくと、それぞれの概念が織り込まれています。

ロータリーの創立のときから始まり、色々な概念が生まれ、変遷し、それが今の職業奉仕の、標準定款の中の職業奉仕の定義や、目的の中にすべて繋がっているということを理解していただけたらと思います。いろいろな人がいろいろな職業奉仕観を持っていて、それが一人歩きしてしまっている中、それを否定せず、皆それぞれが思っている百人百様の職業奉仕論でいいのではないかと考えていますが、職業奉仕は本来こうあるべき、というものが本当はあるのかなとも思います。